

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(英語)／杉浦  
裕子

### ■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

#### I. 学長の定める重点目標

##### I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

#### 1. 目標・計画

○英語コースに所属する学生に対しては、たとえ小学校教員を希望の学生に対しても、小・中・高どこの学校でも教えられるような英語運用力を身につけさせることが、「高度専門職業」としての教員養成につながると考える。そこで、私の授業実践としては①読解・発話・英作文の指導を授業内容とする。②読解については学部の「英文講読」や大学院の「英米文化研究」の授業において、やや難解な文章の精読を通じて適宜文法を確認しながら行い、発話については「英米文学研究Ⅰ」や大学院授業でにおける劇の台詞練習を通じて、英作文は「英語基礎研究」におけるエッセイ・ライティングの指導によって行う。③成績評価はそれぞれの授業に定めている基準によって行うが、15回の授業を通じて学生の能力の底上げを重視する。

○4年生対象の「教職実践演習」を通じて、この科目は新規開講科目なので試行錯誤の部分もあるかと思うが、学生が英語教員としてだけでなく、教師としての資質能力を振り返り、足りないところを補えるような授業内容を目指す。

#### 2. 点検・評価

○年度目標に挙げた授業名のうち、後期の授業(学部の「英米文学研究Ⅰ」や「英語基礎研究」)で、それぞれの授業目標に応じた授業展開をした。特に「英米文学研究Ⅰ」では毎年、劇作品を講読し上演しているが、学生の努力によって例年以上の盛り上がりを見せ、読解力という点でも発話力という点でもかなりの向上が見られた。エッセイ・ライティングを課している「英語基礎研究」でも、昨年度の授業で見られた学生の傾向を踏まえて適切な指導を行ったため、学生たちも昨年より高レベルのエッセイを書けるようになった。

○教職実践演習は、新規開講科目で授業担当者として試行錯誤が続いたが、後期も前期に引き続き、その時の学生の必要に応じた授業展開を行った。時にはドキュメンタリーを見せるなど、教職に夢が持てるような工夫も行った。キャリアノートをもっと活用すべきだったというのが唯一の反省点であるが、総じて学生からの反応は好評だった(独自に行ったアンケート調査による)。

## Ⅱ. 分野別

### Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

- 新4年生の担任として、「教職実践演習」の授業等を通じて学生が教員としての資質能力を総合的に高められるような助言・指導を行う。また、Eポケット(英語コース学生用の資料室)で採用試験対策勉強をする学生に適宜声かけを行い、学習を支援する。
- ゼミ生の卒業研究を支援し、ある程度の論文が書けるように指導する。また、半期遅れで卒業予定のゼミ生に、採用試験対策と平行しながら卒論の指導を行い、中間発表、口頭試問等を計画的に設定する。
- その他の英語コースの学生や授業で接する他コースの学生達とコミュニケーションを図り、必要な学習支援を行う。

#### 2. 点検・評価

- 新4年生の担任として、特に「教職実践演習」の授業を通して関わり、今までの3年間以上に彼らのことをよく知ることができた。
- ゼミ生の中に卒業単位が危うい学生がいたが、とりこぼしをしないように適宜声かけをし、必要単位をすべて取らせて、卒論も仕上げさせた。
- その他英語コースの学生、授業で接する他コースの学生、留学生などに対して、時に相談に乗ったり、時に手助けを行いながらコミュニケーションをとった。

### Ⅱ-2. 研究

#### 1. 目標・計画

- 平成23年度から科研費の研究で行っているエリザベス朝の演劇ネットワークに関する研究を引き続き行う。
- 秋のシェイクスピア学会のシンポジウムもしくは個人研究発表に応募する。
- 『九州英文学研究』に論文を投稿する。
- 昨年不採用だった別の論文の書き直しと投稿を目指す。
- 鹿児島近代初期演劇研究会で申請中の科研費が採択された場合、その計画に基づいて研究を行う。

#### 2. 点検・評価

- エリザベス朝研究会では、発表も行き、研究の進捗状況を研究会仲間にも知ってもらいつつ、いろいろとディスカッションも行った。
- John Lylyに関する研究の更なる成果は2014年5月の日本英文学会全国大会で発表が決まっている。
- 2013年秋は日本英文学会九州支部で研究発表をおこなった。
- 『九州英文学研究』に投稿した論文は審査の結果採用され、無事に発行された。
- 「ノヴェラから舞台への妊婦表象の変化」の論文を書き直し、本学の『研究紀要』に投稿した。

## Ⅱ－3. 大学運営

### 1. 目標・計画

○英語コースの中で諸先生方と協力し合い、コースに貢献する。  
○担当の委員会や専門部会(学部教務委員会、教職実践演習実行委員会、実地教育専門部会、その他)の仕事を粛々と行う。

### 2. 点検・評価

○英語コースの諸先生方と、良好な人間関係を保ちつつコース運営に貢献している。  
特に、鳴門英語教育学会の事務局長は大変だったが、先生方の協力の下、なんとか仕事を全うできた。  
○教務委員やいくつかの専門部会の仕事もめくりなく行った。  
とくに外国人嘱託講師と教務課との間で、連絡のやりとりを仲介するする必要が多くて大変だったが、教務課の人が困らないようにできるだけの手助けをした。

## Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

○免許更新講習で、昨年の講習内容を改良し、教育の現場で活かしてもらえるような講習をする。  
○附属学校での研究会参加や教育実習見学や授業を通して大学と附属学校の連携を図る。  
○留学希望の学生の相談に乗る。  
○教育支援アドバイザー制度に登録し、需要があれば地域の中・高などで生徒、教師、保護者を対象に、学校教育に資することのできるような文学講義をする。

### 2. 点検・評価

中間報告に書いたこと以外では、  
○アドバイザー制度には毎年登録しているが、これまで要請がなかったが、今年は初めて要請があった。アドバイザー制度以外の依頼も含めて2月～3月にかけて3回、地域の中学校・高等学校に行った。  
○今年は留学生との交流が例年になく多い年だった。直接の指導教官ではなかったが、授業やその他で教員研修留学生たちと親しくなった。神戸女子大で行われたイギリスの劇団によるシェイクスピア劇の観劇に連れて行ったり、映画に連れて行ったり、教員研修生の研究成果報告を聞きにいくなどした。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)